

第 1 話

はじまり

あの満天に広がる星空は、きっと
女神様の魔法だったんです――

リリアーナ・クレール

1.1 プロローグ

その人はアレの前に立ち塞がりました。

当時の私はアレが何なのか全然知らなかったけど、きっととても強大で邪悪なものだということは分かりました。

あの時、アレは――悪竜の群れは明らかに悪意を以って、森を焼き、家屋を踏み潰し、人を食らい、命を蹂躪していたのです。

悪竜は女の人も、子供も、お爺ちゃんお婆ちゃんも見境なく殺していきました。村の腕利きの人たちも、悪竜から皆を守って死にました。仲のいい友達も何人も居なくなって、私のお父さんもお母さんを庇って...

その時です、その人は私たち前に現れ、アレとの間に立ちふさがりました。

その人が張った結界によって、村は不思議な守りに包まれます。
あらゆる一切の邪悪、不条理、暴虐を断つ、清浄なる夢幻の守り。
それは悪竜であっても例外なく防ぎました。

悪竜は困惑します。

『この結界は何なのか、何がここまで強力な結界を作り上げたのか。』

そんな中、その人は臆することなく悪竜の群れへと突き進みます。
その人の杖の一振りは、青白い弧を描き、その軌跡は一条の星となって次々と悪竜を撃ち落としていきます。

一匹、また一匹と打ち落とされていく中、悪竜は理解します。

『自分たちを打ち落としているのは、あの村を守っているのは、その人なのだ。』と。

悪竜の群れはあの人を倒さんと向かっていきます。

ある悪竜は鋭い牙で食らいつきました。

ある悪竜は鉄より硬い爪を突き立てました。

ある悪竜は灼熱の業火で焼き払いました。

——数百の悪竜がその人へと攻めかかりました。

それでも——それでも、その人は怯みません。

道を阻む悪竜を次々と打ち砕き——

一歩、また一歩と群れの中心へと突き進んでいきました。

そして——その悪竜の群れの主と相対するのです。

——その時は来ました。
それは、星空そのものでした。

「其は虚無の海に輝く星。途絶えず、揺るがず、違えず、人を照らす希望の光」

その時の光景を忘れたことはありません。
真昼の空に広がるのは満天の星空。
今まで見たどんな景色より、それは美しく鮮烈で、そして何より——

「邪悪なるものを撃ち滅ぼし、人の世に安寧と救済を——！！」

私の心を掴んで離しませんでした。
だから私は——